

三内航海運史 IV 水軍 2

(4) 軍船

②関船（せきぶね）と小早（こはや）

関船は、戦国時代から江戸時代にかけて使われた日本の軍船のひとつで、大型の安宅船（あたけぶね）と小型の小早との間に位置する中型軍船であるが、慶長14年（1609）に江戸幕府が諸大名の水軍力削減のため、500石積以上の大型船の所有を禁止し、西国大名が所有する安宅船のすべてを没収したため、以降は関船が最も大型の軍船となった。

関船は、軍船として主力の安宅船に比べ攻撃力や防御力で劣るが、小回りが利き、速力が出るため機動力に優り、近代の海軍でいえば巡洋艦に相当する活躍をした。明確な定義はないが、安宅船同様に上部構造物として総矢倉（楯板を張り巡らせた装甲）を持ち、櫓の数が40挺～80挺であるものが関船、40挺以下を小早と称したとされている。

安宅船、関船、小早はいずれも、当時の和船に共通する特徴として、竜骨を用いずに板材を釘と『かすがい』で繋ぎ止める造船法を採っており、構造的には西洋船や中国船より脆弱であった。

関船の由来は、中世の海賊衆が海上の要所に関所を設け、「通行する船から通行税を取ることに使われた船」であることからとされるが、憶説の域を出ない。しかし、通行税を支払わない船舶を追うため、早さを重視した手頃な船だったので、軍船としても使用されたことは間違いないようだ。通常は櫓数40～50挺で漕ぎ、船周りの楯板は安宅船に比べて装甲を薄くしたが、時には竹を使用するなど軽量化していた。

江戸幕府の安宅船禁止令により諸大名は、関船を制限いっぱいまでの大きさで建造し、これを鮮やかな漆塗りで仕上げ、様々に装飾した豪華な屋形を設けて御座船（ごさぶね）とし、参勤交代などに用いて大名の権威を誇示した。しかし、泰平の世の中で次第に軍船的要素を失い、幕末の海防の危機には、まったく用をなさない存在となっていた。

御座船の中でも寛永7年（1630）、3代将軍家光の時代に建造された『天地丸』は、廃船に至る幕末までの約230年間、将軍の御座船の地位にあった。『天地丸』は500石積、76挺立てで船体、総矢倉、屋形などの全てが朱の漆塗りで、随所に金銅の金具をつけて豪華な装飾が施され、将軍の御座船にふさわしい華麗な外観をしていた。

小早は、連絡や偵察など補助的な支援の船である。安宅船や関船同様、帆と櫓を持ち、平時の移動には帆を用い、戦闘時には櫓で航行する。

小早の由来は、「小型の早船（関船）」とされている。小早の甲板構造は、安宅船や関船のように楯板を張り巡らせた装甲総矢倉を持たず、半垣造りと呼ばれる足を隠す程度の低い垣立てを持つのみで防御力に劣るため、戦闘での役割は補助的であったが、その軽快な機動力を活かして武士が乗り込み接近戦を主とし、偵察や伝令などの用途にも用いられた。櫓の数は40挺以下とされ、船団では駆逐艦の役割をしていた。

水軍の軍船には安宅船、関船、小早の他、兵員や兵糧を運んだ荷船、関船や荷船などに楼を組み、高い位置から敵の安宅船などを襲う井楼船（せいろうせん）などがあり、安宅船を中心として船団を組み、太鼓や軍配、砲音、灯火などの信号で様々な陣形が決められ、船団の行動が統制されていた。



関船(左)と小早(上)
写真提供：船の科学館